

原著

特別養護老人ホームにおいて看取りをした家族の
満足感に影響を及ぼした経験
Experiences Affecting Family Satisfaction
with End-of-life Care in Nursing Homes

橋本萌子¹⁾*, 高橋恭子²⁾, 大島憲子²⁾

1) 認知症介護研究・研修東京センター

2) 神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部社会福祉学科

Moeko Hashimoto¹⁾, Yasuko Takahashi²⁾, Noriko Oshima²⁾

1) Tokyo Center for Dementia Care Research and Practices

2) Department of Social Work, Faculty of Human Services,
Kanagawa University of Human Services

抄 録

- [目的] 特別養護老人ホームにおいて看取りをした家族の満足感に影響を及ぼした経験を明らかにし、介護職員の介護実践への示唆を得ることを目的とする。
- [方法] 特別養護老人ホームにおいて入所者を看取った7家族に半構造化面接を行った。分析は、Colaizziの分析方法を参考に質的帰納的に行った。
- [結果] 分析の結果【介護に対するの価値観、看取り期に抱く不安やストレスを理解した上での声掛け】【できる限りのことを行うことと親族等との関係性】【入所者の面会以外に目的を持てること】【入所者と時間・空間・経験を共有すること】のテーマが導かれた。
- [結論] 介護に対する価値観や親族等との関係性の理解、看取り期以前から家族ができることを意識した関わり、施設がコミュニティになり得ることを意識しながらの介護実践が介護職には求められることが示唆された。

キーワード：特別養護老人ホーム、家族、経験、満足感、看取り

Key Words：Nursing home, Family, Experience, Satisfaction, End-of-life care

はじめに

我が国における死亡場所別死亡者数は、変化している。自宅で死亡する割合は、1995年18.3%であったが、2020年には15.7%に減少している。1995年には1.5%であった老人ホーム（養護老人ホーム、特

別養護老人ホーム（以下、特養）、軽費老人ホーム及び有料老人ホーム）では、2020年には9.2%に増加し、徐々に介護施設での死亡が増加している¹⁾。その背景として、高度経済成長期を迎え都市化が進んだことにより、核家族化が進行したことが挙げられる。また、女性の社会進出も進み、共働き世帯が増え、家族の介護力が不足したこと等も考えられる。さらに、地域包括ケアシステムが推進され、重度な要介護状態になっても住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう住まい・医療・介護・予防・生活支援を一体的に提

著者連絡先：*橋本萌子

認知症介護研究・研修東京センター

E-mail：m.hashimoto@dcnet.gr.jp

(受付 2022.9.6 / 受理 2022.12.11)

供することが目指されている²⁾。特養における死亡は、2006年に看取り介護加算が創設された以降、より高い増加傾向にあることも明らかにされている³⁾。

今後、特養が看取り介護の方針を持てるような支援を行ったりすることで、特養内での死亡が増加する可能性も示唆されており、特養での看取りは、その介護の質の向上も含め求められる³⁾。

先行研究では、在宅で看取りをした家族の満足度に焦点を当てた研究が多く、夫婦の日常的なやり取りや介護者自身の介護についての有能さの評価が満足感に関わることが明らかにされた⁴⁾。また、家族の満足は看護の処置ケアよりも、いかに安楽を得て、疼痛コントロールされ、安らかな死を迎えられたかで評価されていた⁵⁾。さらに、「終末期に家族が医療者から本人の意思を尊重した意思決定の支援を受けることが本人の希望に沿った最期の生活の実現に繋がり、その結果として遺族の看取りの満足度が高まる」ことも明らかにされた⁶⁾。看護師には、グリーフケアに必要な力量をつけるための教育システムや学びの場の確保等、教育の必要性について指摘されている⁷⁾。その他、木坂らは「家族の介護能力を把握すると同時に、具体的な知識や実現可能なケアの方法の提供と、さらに本人を取り巻く家族員の協力が得られるよう家族のつながりを強め、介護能力を引き出す関わり」が重要であると指摘した⁸⁾。中里らは、家族が本人の意思を尊重したケアの選択に関与できるように医療者が支援を行うことで遺族の看取りの満足度が高まることを示しており⁶⁾、これらのことから、看護師等の医療従事者には、家族自身が介護に関与できるような支援や、本人の意向を軸に働きかける意思決定支援の重要性が求められている。

自宅で看取りをした家族の満足度に焦点を当て、看護師等医療従事者に求められることについて考察した研究は多いが、特養において看取りをした家族の満足度を高める経験を明らかにし、介護職員に求められる実践について分析した研究は見当たらなかった。

そこで、本研究は特養において看取りをした家族の満足感に影響を及ぼした経験を明らかにし、介護職員の介護実践への示唆を得ることを目的とする。

I. 研究方法

1. 研究デザインとその妥当性

本研究の研究デザインは、半構造化面接を用いた現象学的視点に基づく質的帰納的研究である。Husserlらによって発展した現象学は、本質的研究であり、認識の源泉を求め、その特徴は「記述」である。対象者の経験、報告、解釈を加えて陳述するのではなく、現前するものに厳密に留まり記述する。

質的研究としてよく用いられるグラウンデッド・セオリーでは、松葉ら⁹⁾によると社会的相互作用を観察し、インフォーマントが自分自身や他者について発言することを聞いたこと等がデータ源となる。また、西村ら¹⁰⁾によると個別の経験を取り扱うが、データを研究者自身が解釈し、カテゴリー化する。他のデータとも照らし合わせながらカテゴリーを微調整し、揺るぎない抽象度の高い記述カテゴリーをつくり、カテゴリーや理論で全ての事例を説明できるようにすることを目的とする。さらに、松葉ら⁹⁾は、オープンコーディングの段階では可能な限り研究参加者の言葉を用いて概念化していくが、理論のアイデアを作り出す段階では、研究者の以前の経験はデータとなり、経験や既存の知識を使うという。

一方、現象学的研究は、松葉ら⁹⁾によると「生きられた経験に関心を寄せるので、唯一の重要なデータ源は研究している現象の現実を生きているインフォーマントである。」という。また、西村ら¹⁰⁾によれば、現象学的研究は、研究者の過去の経験を脇に置いておきながら、データそのものがどのような意味を持っているのか考え、現象の本質を探究していくものである。一つの事例を掘り下げ、その事実がどのように成り立っているのか構造について記述することを目的とする。データの意味を明らかにするために文脈を重要とし、息遣いなども分析可能とする。

本研究は、介護施設において看取りをした家族の満足感に影響を及ぼした経験を明らかにし、介護職員の介護実践への示唆を得ることを目的としている。そのため、家族の満足感に影響を及ぼした経験はどのように成り立っているのか記述する必要がある。看取りの介護において、一人ひとり異なった状況にある人を対象とし、それぞれに合わせた個別ケ

アが重要とされ、先入見を持たない開かれた態度をとることが大切であると考え。対象者が語る言葉の意味や意図、感情などは数量化することが困難であり¹¹⁾、対象者の生きられた経験を扱うことが重要である。対象者が経験を振り返り語ることを通して、どのようにその経験を意味づけているのか、研究者の過去の経験を脇に置いておきながら、認識の源泉を求め、分析することで、看取りをした家族の満足感に影響を及ぼした経験を明らかにすることができることから、現象学的研究は本研究にふさわしいと判断した。

2. 用語の定義

本研究における用語は以下のとおり統一する。

看取り：「近い将来、死が避けられないとされた人に対し、身体的苦痛や精神的苦痛を緩和・軽減するとともに、人生の最期まで尊厳ある生活を支援すること」¹²⁾。

看取りの状態・看取り期：協力施設において定義されている「入所者が疾患等のため、あるいは加齢によって体力の低下が著しくなり、治療による改善の可能性が認められないと医師が判断した時のこと」。

満足感：国語辞典より満足とは「望みが満たされること。」とされている。そのため、望みが満たされている感じを指すことで統一する¹³⁾。

3. 研究対象者

研究協力施設は、関東地方にある特養1施設である。対象者の選定基準は、特養入所中に施設で看取することに同意し、入所者の看取りをした主な面会者で、精神的苦痛が生じないよう、精神面において回復されてくるとされている死別から2、3年程度経過した^{14、15、16)}人とした。また、年齢や性別、血縁関係は問わないこととし、本研究に対し十分な理解が得られ、施設入所前から看取り後のことについて語るができる人とした。認知症やその疑いがあり、インタビューに答えることが難しい人は除外した。

調査協力の依頼は、機縁法により協力の得られた施設の施設長、生活相談員に選定基準に基づき、研究対象者の選定を依頼した。個人情報保護の観点から依頼後、選定された7人の対象者にインタビュー

の意向伺い書を協力施設経由にて送付し、7人からインタビューへの協力の承諾を得た。その後、承諾を得られた7人に対し研究の概要説明書や同意書等を再度、協力施設経由にて送付した。7人からインタビュー及び協力施設からの情報提供として、ケアプランから個人が特定できないよう配慮し情報を得ることの同意も得た。インタビュー前にも口頭にて研究の説明を行い、インタビューを実施した。

4. データ収集方法

2020年8～11月に新型コロナウイルス感染症を考慮し、電話面接法にて半構造化面接を行った。面接時間は、対象者の年齢を考慮し負担とならないよう1人1回につき30分～1時間程度で実施した。面接内容は、看取り期に限定せず入所前から看取り後までの対象者の経験が語られるよう1回目は「①入所に至る経緯、②入所者との入所前後の関係性、③面会頻度、④入所していた期間から看取り後に感じていたことについて」とした。研究者の質問の仕方によって対象者の回答を限定してしまうことが考えられるため、できるだけ自由に語ってもらい、質問は最小限に留めた。

1回目の面接後、逐語録を作成して分析を行い、2回目の面接を行った。2回目の面接内容は「①分析結果は、自らの経験を表しているか、②結果が自分の経験と合っていない場合、どのように違うか、③分析過程において疑問点があった場合について尋ねる」である。

記録は、ICレコーダーによる録音の承諾を得られた対象者にはICレコーダーで、承諾が得られなかった場合は、聞き取りながら記録した。その他、介護施設からの情報提供としてケアプラン等から、入所者・対象者の基本属性や面会時、看取り期における入所者・対象者の様子の概要を個人が特定できないよう配慮し情報を得た。

5. 分析方法

データの分析は、Colaizzi¹⁷⁾の分析方法を以下の手順に従い分析した。

- ①半構造化面接で得られた逐語録を繰り返し読み、何らかの印象を持つ
- ②個々の記述に戻り、満足感に影響を及ぼした看

取り介護に関係のある有意な陳述を抜き出す

- ③個々の有意な陳述に対して、対象者にとっての意味を記述し、意味を定式化する
- ④このプロセスを繰り返し、定式化された材料を類似する意味らで集めていくつかのテーマ群に整理する
- ⑤それぞれのテーマが正しいことを確認するために、もとの記述に戻って確かめる
- ⑥現れたテーマ群に対して、総括的な記述をする
- ⑦総括的記述を本質的構造に還元する
- ⑧対象者に出てきた結果が自らの経験を表しているか再度電話面接を行い、確認してもらう

研究者の質問に対して語られた経験は、当時を思い出しながら語られたものであり、インタビュー時にはもう一度経験が更新され、研究者と対象者の共同で創られた言葉となって語られる。そのため、研究者の質問に対してどのように応じられているか、文脈の流れや言い回し、オノマトペ、声のトーン、語りの間等にも着目し分析した。

なお、分析にあたっては、介護福祉学及び看護学の専門家と社会福祉学の専門家2名のスーパービジョンを受けながら進めた。

6. 倫理的配慮

協力施設の施設長及び生活相談員に研究の趣旨や

個人情報の取扱い、データ収集と保管方法や公表方法、および研究目的外で使用しないこと等について文書と口頭にて説明し、協力の承諾を得た。研究参加者に対しても同様に文書と口頭にて説明し、同意を得た。なお本研究は、2020年7月神奈川県立保健福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（保大17 - 68）。

II. 結果

1. 対象者の概要

研究協力施設は、関東圏に所在するM特養である。対象者の概要は表1に示した。対象者の年代は60代～70代、続柄は息子の妻3人、息子2人、娘2人、入所期間は1か月半～7年（中央値5年）、看取り期間は3日～4年（中央値2週間）、死別後経過年数は2年～4年（中央値3年）であった。

2. 分析の結果

具体的な分析は、松葉ら⁹⁾の方法を参照し、特徴的な言い回しや主語と述語の不一致、言い間違い、言い淀み、沈黙、同じ言葉遣いの反復、副詞、オノマトペ、声のトーン、語りの間等に着目しながら、半構造化面接で得られた逐語録を繰り返し読み、表現がどのように変化しているか、文脈の流れも重視

表1 対象者の概要

項目	A	B	C	D	E	F	G
年代	70	70	70	70	60	70	60
続柄	息子の妻	息子	娘	娘	息子	息子の妻	息子の妻
入所期間	4年	7年	2年	5年	6年	5年	1ヶ月半
看取り期間	3日	1ヶ月	5日	1年	2週間	4年	3日
死別後経過年数	2年	4年	3年	2年	3年	3年	2年

しながら読み込んだ。その後、Colaizzi¹⁷⁾の分析方法を参考に、満足感に影響を及ぼした看取り介護に関係のある有意な陳述に対して、対象者にとっての意味を記述し、意味を定式化した。このプロセスを繰り返し実施し、定式化された材料を類似する意味から集めていくつかのテーマ群に整理した。その結果、特養において看取りをした家族の満足感に影響を及ぼした経験として、4つのテーマと8つのサブテーマが導かれた。以下にテーマごとに結果を述べる。【】はテーマ、<>はサブテーマ、「」は対象者の語りを表す。意味のわかりにくい語りについては、筆者が（ ）内に説明を加えた。

(1) 【介護に対しての価値観、看取り期に抱く不安やストレスを理解した上での声掛け】

Bさんの「夜は人間（職員）が少なくなるじゃん。そういうときってやっぱり、あ、いざそういうなんか起っちゃったらどうしようとかさ、そういう不安は多少あったけど、たまたまなかったらいいんだけどね。そういうなんか不安めいたものはあったよね。（職員の）人数が少ないときにね」という語りにもあるように、家族は、看取り期に不安を抱いていた。また、Aさんの「やっぱ認知症が進んでひどくて、暴言吐いたりなんかして」等の語りにもあるように、家族は入所者から時には攻撃的な言葉をかけられ気が重くなったりする。その時に体調や精神面を気遣う<職員の対応の早さと声掛け>により、家族は自分一人ではないと<職員の言葉かけで安心感を抱く>ことができ、心強さを感じるができる。Gさんは「やっぱりあの不安ですよ、こうあの見守ってる方も。うん。だからそこへちょっとこうに一言二言なんか優しく言葉かけしてくれると、ああ自分一人じゃないんだって思いが強くて、でなんかすごい安心感？うん、あのもらった」と職員の言葉かけから「安心感をもらった」と受け身の表現を用いて語った。

また、職員がフォローしてくれるから、この施設であれば自分は入所者のために頑張ることができると思うことができている。研究者の「暴言によって、面会をためらったこととかありますか」という質問に対し、Aさんは「えーとね、気が重いときに、なんか（施設の）玄関入る前にちょっと気が重くなっ

たので、なんか意見なんかあったら何でも言ってくださいって（職員が）言うので、入る時に花でも見て（見られたら）、いいなと思ったら、すぐに花を植えておいてくださったんですよ。それがもう速さに、びっくりして、ここにね、いてくださるなら大丈夫だなと思って、そういう不安はなくなりましたね。暴言吐いても別に、うん、あの、病気だからとか思えるし、信頼ですよ。ね、それで気持ちがすごく落ち着きます」と語った。「ここにね、いてくださるなら大丈夫」と息子の母がM施設にいてくれるなら大丈夫という表現を用いて語られた。続いて「なんか歌うったり、暗くならないで、すみましたね。私あの、馬鹿とかなんとか言われてるんですけど、まあでもわかってるから言うのよとかなんかに言ってくださったり、そういうなんかフォローしてくれる。すごく」と職員がフォローしてくれることについて語った。そして、Aさんは「（職員がAさんに）声かけてくださって、ここなら大丈夫だなと思いましたね」と語り、最初は息子の母がM施設にいてくれるなら大丈夫という表現を用いて語っていたが、経験を語ることを通して、Aさん自身の語りに導かれて、この施設であれば、職員がフォローしてくれるから自分は入所者を看取ることができると表現を変え、心強さを感じるようになっていた。

さらに、Bさんの「ほら言われるじゃない、なんか適当にやってなんてね、施設に入れちゃったって、昔の人は結構言うんだよ、そういうの。それもあるから、そればかりじゃないけどね、親だから一生懸命やんなきゃいけないと思ってやってたけど。」「どんどんどんどん追い詰められていくんだよね、自分がね。別に何しようっていうわけじゃないんだけど、なんとなくなんとなくそういう状況に陥っていくよね。」という語りにもあるように、子どもは、親の介護を行う責任は子どもにあると考えていたり、周りからの目を気にして、施設入所をためらい、介護は子どもが行うものと考えたりしている。時に周りに頼ることができず、追い詰められてしまうこともあった。しかし、Bさんは、入所者の看取り期に施設に泊まった際、「（職員から）まだまだ少し様子見るようだから、ここにずっと泊ってるのも大変だからね、夜帰った方がいいんじゃないですか、もし（容体が）悪くなったら連絡しますよって言われ

たわけ。僕はほんとにありがたかったよね。」とも語った。職員が<家族の様子を汲み取った、タイミングのよい言葉かけ>をすることで、無理なく入所に付き添うことができていた。

(2) 【できる限りのことを行うことと親族等との関係性】

Aさんは「認知症が進んでひどくて、暴言吐いたりなんかして、大変だったなあとと思うんですけど」と語る一方で、「(入所者は)花が好きだったので、花壇で花を散歩にね、一緒に。あと何でも食べていいので、もうちょこちょこ持って行って、もう持っていくのが習慣になっちゃって。」「(施設に) 行くのがね、習慣でいうか、生活の一部になっていたの。」とも語った。親孝行をしたいと思っている家族は、施設入所後も<介護の大変さを感じながらも、自分にできる介護を継続>し、入所者のためにできる限りのことを行うことは生活の一部となっていた。日常生活上におけるケアは職員が行う施設で、大変さを感じながらも看取り期だけではなく看取り期以前から<自分にできることを行う>ことで、最後には「母にはね、悔いなくできた」と語った。

また、特に息子の妻においては親孝行のために自分にできることを何でも行うことが、親族等よりよく思われないこともあり、<何でもやりたい思いと家族との関係性>について、困惑を感じていた。息子の妻であるAさんは「(息子の妻が入所者と) 楽しくやってるのを、あんまり家族としては面白くなかったのかもしれない」、「やりたいことなんでもやりたいと思ったから。悔いはないんですけどね。(他の家族のことも) 心配りするべきだったのかなって」と語り、その時自分はどうすればよかったのか結論付けられずにいた。

(3) 【入所者の面会以外に目的を持てること】

家族は施設のボランティアに参加したり、職員との会話を楽しんだり、入所者の面会以外にも目的を持って施設を訪れていた。「これからも母いないんですけど、皆さん他の方もお花ね見て癒されるとか言って下さるから、コロナ収まったらまた花壇づくり行こうかなって思ってます。」「M施設さん大好きなんで。皆さんいい人で。もうね全体的に好きな

のよ。行くのが。」(Aさん)、「ヘルパーさん(介護職員)に会うのもいろんな話してるから楽しいしさ」(Bさん)等の語りが聞かれた。面会に行くことは<家族の活力>となり、<入所者が入所しているからだけではなく、施設が好きだから行く>ということがわかった。

(4) 【入所者と時間・空間・経験を共有すること】

家族は面会時におやつを持参する等して、入所者と共に食事をして過ごしていた。Eさんは「面会時に、食事ができるんです、今日行くから面会分の我々の家族の食事もお願ひしますって言えば、食事作って頂けて、で一緒にお昼を、あの一本人っていうか、入所者の本人と併せて、食事をすると。そういうサービスがあのあるもんですから、非常によかったです」と語った。入所者と食事を通して時間や空間、経験を共有することが満足感に繋がっていた。

Ⅲ. 考察

1. 特養において看取りをした家族の満足感に影響を及ぼした経験

特養において看取りをした家族の満足感に影響を及ぼした経験として、入所者を看取ることができると家族自身が思えることや入所時から家族自身でできることを継続して行うこと、入所者の面会以外に施設を訪れる目的があり、施設を訪れることで「家族」として以外に「一個人」として受け入れてくれていると実感できることが考えられた。

(1)入所者を看取ることができると家族自身が思えること

入所者を看取ることができると家族自身が思えた経験は、満足感に影響を及ぼしたことの一つなのではないかと考える。山本¹⁸⁾は、「日本人は『親孝行』の理念の下で介護に高い価値を置いている」ことや「被介護者が介護者の子供(被介護者の孫)に対して親切で愛情深いために、自分の子供に代わって介護する」という考え方等を介護者は持っていることを述べており、親孝行することに非常に高い価値を置いている。本研究の対象者の年代は60～70代であり、被介護者は親もしくは義親であった。親の介

護を行う責任は子どもにあると考えていたり、周りからの目を気にして、施設入所をためらい、介護は子どもが行うものと考えたりしていた。被介護者の世代は特に親孝行に関する社会規範が強く、その世代を介護する介護者は介護に高い価値を置き、強い責任感を持っていたと考えられる。

しかし、Gさんの「やっぱりあの不安ですよ、こうあの見守ってる方も」やBさんの「どんどんどんどん追い詰められていくんだよね、自分がね」という語りにもあるように、家族は不安を抱えたり、追い詰められたりすることもある。そこで、家族の介護に対しての価値観、看取り期に抱く不安やストレスを理解した上で職員から声をかけられることで、安心やありがたさを感じ、Aさんの「ここなら大丈夫だなと思いましたね」という語りにもあるように、入所者を家族自身で看取ることができると考えたのではないかと考える。そのように思えることで、親もしくは義親の介護を行う責任を果たすことができ、満足感につながったのではないかと考える。

(2)施設入所後から看取り期まで自分にできることを行うこと

親孝行をしたいと思っている家族は、看取り期になってから何か特別なことを始めるのではなく、看取り期に入る前から入所者と共に散歩をしたり食事をしたり等自分にできることを継続して行っていた。それは前述のとおり、介護に高い価値を置いているためだと考えられる。介護に大変さを感じながらも最後まで自身にできる介護を続けることで、「悔いなくできた」と感じることはできたのではないかと考える。AさんとGさんは看取り期間が約3日であったが、満足感を得ることができたのは、看取った期間ではなく、これまで入所者に何をしてきたかが関係しているからではないかと考える。技術を要する身体的なケアをすることが難しくとも、時間や空間、経験を共有することは、満足感に影響を与える一要因ではないかと考える。先行研究^{4,19)}において、自宅で看取った家族は「介護ができたと思えること」が満足感の高い看取りに関わっていることが明らかとなっていたことが、介護施設において看取る場合にも同様に、自分にできる介護を行うことが満足感に影響していることが明らかとなった。

しかし、特に息子の妻においては親孝行のために自分にできることを何でも行うことが、親族等からよく思われない場合もあった。山本¹⁸⁾は、『主婦』あるいは『嫁』は独立した1つの職業とみなされ、実際の介護活動はその一部と考えられている。この社会規範のため、介護者は自己の介護者役割を何の疑問もなく受け入れる傾向がある」という。特に嫁においては、自分には介護をする役割があると受け入れ、介護に困難を感じても耐え抜こうとする。しかし、入所者の実子からすると、Aさんの「(息子の妻が入所者と)楽しくやっていると、あんまり家族としては面白くなかったのかもしれない」という語りにもあるように、息子の妻が一生懸命介護をすることで、入所者の実子に「自分の親を取られた」と感じ取られてしまうこともある。これまで自身が行ってきたことを振り返ると、入所者に対してできる限りのことは行ったから悔いは感じないが、親族等との関係性に心の中でつかかりを感じ、満足感に影響を及ぼしている。

(3)面会以外に施設を訪れる目的があること

家族は介護職員との会話も楽しみにし、施設に行くことが自分の活力となっており、入所者に会いに行くこと以外にも目的を持って施設を訪れていた。介護職員から、自分がいない間の入所者の様子について情報を得るだけではなく、たわいない話をするだけでも家族自身の活力に繋がる。また、家族は施設のボランティアに参加していた。Aさんの「皆さん他の方もお花ね見て癒されるとか言って下さるから」という語りにもあるように、施設を訪れることで「家族」として以外に「一個人」として受け入れてくれていると実感できたのではないかと考える。施設に入所する場合、在宅介護と違い、施設は家族にとって新しいコミュニティになり得るのではないかと考える。家族自身の生活も豊かとなり、最期の満足感につながると考える。

2. 介護実践への示唆

介護職員は、家族とのコミュニケーションの中で、家族が介護に対してどのような価値観を持っているのか、親族等との関係性について着目しながらコミュニケーションを取り、ストレスや不安を抱えて

いる場合には、体調・精神面を気遣った言葉や労いの言葉を看取り後においても介護職員の方からかけることが必要である。

また、家族の介護能力を把握し、家族が施設の中でも介護ができる環境を整え、入所者と家族が時間や空間、経験を共有できるように配慮することが必要である。それは、看取り期に入ってから始めるのではなく、入所時から行うことが重要であると考えられる。

さらに、介護職員は施設が家族にとって一つのコミュニティになり得ることを意識しながら、家族にとっても居心地のよい環境づくりを心がけ、同時に日々のさりげない言葉かけは、介護する側が感じる以上に特養において看取りをした家族の満足感に影響を及ぼすことが示唆された。

IV. 結論

本研究から、介護施設において看取りをした家族の満足感に影響を及ぼした経験として、3点が挙げられる。

第一に、入所者を看取ることができると家族自身が思えた経験である。家族は、親の介護は自分で行うという責任感を持っている一方で、不安を抱えたり追い詰められたりすることもある。その時に、家族の介護に対する価値観、看取り期に抱く不安やストレスを理解した上での職員からの声かけがあることで、安心感を抱いていた。そして、入所者を家族自身で看取ることができると思え、責任を果たすことができ、満足感につながったのではないかと考えられる。

第二に、施設入所後から看取り期まで家族自身でできることを行ったことである。それは、技術を要する身体的なケアだけでなく、時間や空間、経験を共有することでも満足感に影響を与えるのではないかと考えられる。

第三に、面会以外に施設を訪れる目的があったことである。介護職員との会話やボランティアに参加する経験は、家族の活力となり「一個人」として受け入れてもらえているという実感を与え、満足感に大きく影響を及ぼしたことのひとつではないかと考えられる。

介護職員には、家族の介護に対する価値観や親族

等との関係性を理解し、看取り期以前から家族ができることを意識した関わりや、施設が家族にとって一つのコミュニティになり得ることを意識しながらの介護実践が求められることが示唆された。

V. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、新型コロナウイルス感染症流行下において協力施設及び対象者を選定した。そのため、様々な特徴を持つ対象者を選定することに限界があった。属性による違いを分析できなかった点も限界である。今後は、他の続柄よりも入所者と関わりが深く、同年代であると考えられる配偶者や家族の看取りに否定的な人も対象者に含めた探索的研究が必要ではないか。また、対象者は7名とも同施設の特養入所者の家族であった。今後は、他の文化的特性を持つ地域、他の種別の施設を対象とした研究も必要であると考えられる。

謝辞

本研究にご協力いただきました調査対象者の皆様、M施設の施設長様及び生活相談員様に心より感謝申し上げます。

付記

本研究は、神奈川県立保健福祉大学大学院2020年度修士論文「介護施設における満足度の高い看取り介護の実践に関する研究」の一部である。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省. 死亡の場所別にみた年次別死亡数百分率. https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450011&tstat=000001028897&cycle=7&year=20200&month=0&tclass1=000001053058&tclass2=000001053061&tclass3=000001053065&stat_infid=000032119306&result_back=1&tclass4val=0 (2021年10月14日アクセス).

- 2) 厚生労働省. 地域包括ケアシステムの構築について. <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/miraitoshikaigi/suishinkaigo2018/health/dai3/siryousu3.pdf> (2021年10月28日アクセス).
- 3) 池崎澄江, 池上直己. 特別養護老人ホームにおける特養内死亡の推移と関連要因の分析. 厚生 の指標 2012; 59(1): 19.
- 4) 神前裕子. 介護満足度の高い看取りとは—在宅 介護者の事例分析. ターミナルケア 2004; 14(4): 331-337.
- 5) 小川恵子, 島内節, 河野あゆみ. 在宅ターミナル期における癌患者の死別後の家族と看護職による訪問看護の評価. 日本看護科学会誌 2001; 21(1): 18-28.
- 6) 中里和弘, 涌井智子, 児玉寛子, 他. 終末期における医療者から家族への意思決定支援が遺族の看取りの満足度に及ぼす影響. 日本老年医学会雑誌 2020; 57(2): 163-17.
- 7) 松村ちづか, 中山和弘, 川越博美. 主介護者の満足度に影響する在宅ターミナルケア要素に関する研究. 緩和ケア 2006; 16(3): 269-274.
- 8) 木坂恭子, 片山敏子, 松葉庸江, 他. 在宅で看取りをした家族の満足感・不満足感の分析—終末期を迎える療養者を介護する家族を支える看護—. 日本看護学会論文集 地域看護 2013; 43: 19-22.
- 9) 松葉祥一, 西村ユミ. 現象学的看護研究—理論と分析の実際. 東京: 医学書院. 2017; 45-64.
- 10) 西村ユミ, 山本則子. 現象学とグラウンデッド・セオリー. 看護研究 2015; 48(6): 525-535.
- 11) Keen, E. 現象学的心理学. 吉田章宏, 宮崎清孝訳. 東京: 東京大学出版会. 1989; 66-67. (原著発行1975年).
- 12) 全国老人福祉施設協議会. 看取り介護指針・説明支援ツール【平成27年度介護報酬改定対応版】. <https://mitte-x-img.istsw.jp/roushikyo/file/attachment/304137/mitori-kaigo-shishin.pdf> (2021年11月20日アクセス).
- 13) 山口明穂, 和田利政, 池田和臣. 旺文社 国語辞典 第十一版. 東京: 旺文社. 2013; 1410.
- 14) 山田紀代美, 佐藤和佳子, 鈴木みずえ, 他. 介護を終了した介護者の死別期間と疲労感に関する研究. 日本看護研究学会雑誌 2001; 24(4): 21-31.
- 15) 人見裕江, 大澤源吾, 中村陽子, 他. 高齢者との死別による介護者の悲嘆とその回復に関する要因. 川崎医療福祉学会誌 2000; 10(2): 273-284.
- 16) 岡村清子. 配偶者との死別に関する縦断的研究—死別後の孤独感の変化—. 老年社会科学 1994; 15(2): 157-165.
- 17) Colaizzi P. Psychological research as the phenomenologist views it. Existential phenomenological alternatives for psychology. New York: Oxford University Press 1978; 48-71.
- 18) 山本則子. 痴呆老人の家族介護に関する研究; 娘及び嫁介護者の人生における介護経験の意味 2; 価値と困難のパラドックス. 看護研究 1995; 28(4): 313-333.
- 19) 島田千穂, 近藤克則, 樋口京子, 他. 在宅療養高齢者の看取りを終えた介護者の満足度の関連要因—在宅ターミナルケアに関する全国訪問看護ステーション調査から—. 厚生 の指標 2004; 51(3): 18-24.

Experiences Affecting Family Satisfaction with End-of-life Care in Nursing Homes

Moeko Hashimoto¹⁾, Yasuko Takahashi²⁾, Noriko Oshima²⁾

1) Tokyo Center for Dementia Care Research and Practices

2) Department of Social Work, Faculty of Human Services,
Kanagawa University of Human Services

Abstract

[Purpose] To identify experiences that have affected the satisfaction of families who have provided end-of-life care in nursing homes, and to obtain suggestions for care practices of care workers.

[Methods] Semi-structured interviews were conducted with seven families who had end-of-life cared for residents at a nursing home. The analysis was conducted qualitatively inductively, referring to Colaizzi's analysis method.

[Results] The following themes were derived from the analysis: "values toward care, talking with understanding of their anxiety and stress during the end-of-life period," "as much as possible what one can and relationships with relatives," "having a purpose other than visiting the residents," and "sharing time, space, and experiences with the residents."

[Conclusions] Practice care requires the understanding of the values of care and relationships with relatives, a conscious involvement of what families can do before the end-of-life period, and an awareness that facilities become capable communities.

Key Words : Nursing home, Family, Experience, Satisfaction, End-of-life care